

2014/06/19(木) 13:50~14:55 看護情報学特論 I @聖路加国際大学

情報学専攻 M1 濱田亜矢子さん

「看護情報学特論 I を振り返り、女性ホルモン補充療法(HRT)への理解を深める」の発表を終えてのディスカッション

・オーストラリアの HRT の取り組みに Ns は実際どう関わっているか？

→CNS や NP が、医師からは完全に独立したクリニックで業務を行っている。

こういうのが日本でもできるのでは。Ns がまずクライアントを見て全体をアセスメントして問題を見極め、該当科の Dr へつなぐというシステム。病院(医師)だけで行っていくのは限界があると思う。2号館のるかなびのような、更年期前後の女性を対象にしたクリニックを作っては？

先生：HRT の分野でも、HRT を導入してみて実際どういう変化が起きるかというところは Dr の介入が必要だが、以降症状が落ち着いて、経過観察という段階になれば Ns でもできる。日本でそういうことを考えているのは母性・助産領域。

女性ヘルスケア専門看護師(日本女性医学学会認定)というのが作られているが、規定が厳しいこともあり現時点で Ns は 3 名、あまり活用されていない現状がある。

・台湾でなぜ HRT が普及したのか？(台湾では導入され始めたのが遅かったにも関わらず、アジアで最も高い普及率)

→Dr が全国を回ってキャンペーンを行った。待っているのではなく医療者が普及のため外へ出て行った。ネットだけでもだめで、やはり人と人の関わりで広めなければ…

➤先生：海外は国として HRT 推進の政策を打ち出しているが、その政策過程が書かれたものがあるのでは？なぜ国を挙げてやることになったのか。

日本人は自分で考えない、国に言われたことはやる国民性があるので(例えば、メタボ検診で腹囲を測られることに文句を言わずみんな検診を受けている)、政策によってやるのがいいのかもしれない。

➤女性政治家にも期待したいところ。海外は女性を大切にすることが経済の発展につながるという考えがある。日本でも外資系などはそういう考えがあるが、ごく一部である。経済は発展しているのに女性の地位が低い日本。女性にはお金をかけたくない？

➤女性の健康というところでは、今、子宮頸がんや乳がんといった命に関わる優先度の高い疾患にはキャンペーンなども盛んで、国民の目が向けられている。それが受診率にまだ結びついていないという現実もあるが。

➤やはり、市民の理解、知識の普及が大切である。北欧では、男子・女子ともに教科書で更年期を学ぶ機会がある。日本では、母子手帳に更年期を載せてほしいといっても入れてくれない。晩産化が進んでいる今、出産する時点ですでにホルモン分泌が落ち始め、自分

の健康、自分のキャリア、子育て、親の介護…などが一気に降りかかってくる年代であったりもする。あらかじめ知ることによって賢く備えられる。

➤先生：多重役割(multiple role)について。海外の文献には必ず出てくる。性役割に対する問題意識は必須である。先生が過去に研究した性役割意識によるストレス。女性であるが故の問題が、ライフステージに沿ってこんなにあった。周囲の期待や圧力で女性には多くのストレスがかかっている。

文責：M1 佐藤